

今月号の特集は「理学療法士のアイデンティティー」である。「汝自身を知れ」は、古代ギリシャの哲人ソクラテスの言である。「身の程知らず」とはその逆説か？ それはともかく、個人にはそれぞれ自意識があり、常に自己を知る立場にありながら、自己認識は他者を認識することよりも難しい。自己認識は所詮、鏡に映る自己の像を観なければならないように、他者を介して認識する過程ともいえる。そして、自己を知ることなしに、自己が望む生きざまを創造することは困難であろう。これは理学療法士以前の個人として、また理学療法士である個人にも当てはまることではないだろうか。今回の特集はこのような意図で企画した。

■理学療法士のアイデンティティーとは—2000 年への巻頭言：理学療法将来展望(内山靖論文)

理学療法将来展望を模索するなかで、理学療法士の個人的・社会的アイデンティティーについて整理し、理学療法学の確立を通じた理学療法士のアイデンティティーの発達について述べた。

理学療法士を取り巻く環境は急速に変化しており、社会に適応しながら対象者や周囲の承認を受けた保健・医療・福祉の分野での積極的な実践活動の展開と、それを支える健全な科学的志向が求められる。

■理学療法士のアイデンティティーとは—理学療法体系の再構築—(奈良勲, 他論文)

アイデンティティーとは自己同一性と訳されている。広辞苑によれば、「ある人の一貫性が成り立ち、それが時間的・空間的に他者や共同体にも認められていること」とある。これを理学療法士に当てはめると、理学療法士が行う業務(理学療法体系)の一貫性(科学としての理学療法(学)を志向する姿勢およびその価値)が求められる。そして、それを理学療法の対象者をはじめ、社会がどれほど認めているかである。したがって、理学療法士のアイデンティティーを語るとき、理学療法体系を無視することはできないと考える。

■理学療法士として生きる一個人の立場から—(坂本年将, 他)

表題のもとにそれぞれの立場から、8名の筆者に理学療法士のアイデンティティーについて書いていただいた。まずは、アイデンティティーのとらえ方に各人の個性が表れていて興味を持たれる。また、理学療法士を志向した動機、教育的背景、仕事の経歴、そして他者との出会いなどが、各人の理学療法士としてのアイデンティティーの構築にいかにか影響を及ぼしているかが伺える。しかし、8名の方々に共通しているアイデンティティーは、自他ともに認知されるべき「よりよい理学療法(士)」を目指す前向きで清々しい姿勢である。ときには喘ぎ、悲しみ、苦しみながらも、ことばの中に力強さと笑顔とが感じられる。